

テーマ

外国語学習を複合的に捉える

適用分野

外国語教育・学習研究、第二言語習得研究、教材研究



研究名称

外国語学習観の変化に関する研究
複言語・複文化に関する研究

氏名所属

藤原三枝子 教授
国際言語文化センター

内容

高等学校の英語教育では、4技能を総合的に育成する指導、文法指導を言語活動と一体的に行うことが基本方針として挙げられている（文部科学省2009）。中学校段階でも4技能を総合的に育成するとし、現在の外国語（英語）教育の目標は明らかにコミュニケーション能力の育成に置かれている。

2015年度に実施した調査「コミュニケーション中心の教材がドイツ語学習者の動機づけに与える影響に関する研究」（科研費研究課題番号：26370646）では、ドイツ語の学習が進行するにつれ、「文法は重要」という学習観がより強くなり、その一方で「テキストのオーセンティック性」の重要性が低下し、「日本語訳」の重要性が強まる傾向を示した。このように、質問紙調査（2015年度前期調査参加：1535人、後期調査参加：1367人、双方の調査参加：1191人）の量的分析では、コミュニケーション型教材による授業によって、「文法・訳読」に対する肯定的態度が強まる結果を示した。学習者に対する聞き取り調査では、大学入学前の英語学習に言及するケースが多い。高校の英語教育が日本語による文法知識の獲得に重点を置いてきたことにより、「外国

語学習とは文法学習だ」、「文法は日本語で学ぶもの」という学習観を身につけている場合が少なくないこと、しかし、大学で受けたドイツ語のコミュニケーション型授業によって学生の外国語学習観が運用能力重視へと変化する可能性が示された。

こうした研究結果から、現在は、コミュニケーション型ドイツ語の授業を受ける学習者の外国語学習観・態度を、先行する英語教育との関連性、及び、ドイツ語授業を受けることによるその変化や強化の影響要因を、量的・質的な混合研究法により明らかにすることを目指している（研究課題番号：17K02913）。また、大学における初修外国語であるドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語・韓国語・（外国人を対象とした）日本語の教員とともに、ICTを活用した協働研究を開始した（研究課題番号：20K00879）。文部科学省の外国語（英語）教育の方針にも大きな影響を与えているCEFR (Common European Framework of Reference for Languages)の複言語・複文化の理念は、言語学習を複合的に捉えている。大学における第2外国語との出会いも学習者の中に培われる新しい言語体験として、複合的に捉えることができる。

キーワード

ドイツ語、コミュニケーション中心、外国語学習観、動機づけ、CEFR、複言語

連携方法

■ 講演 ■ 研修 ■ 研究相談 □ 学術調査 □ コメント ■ 共同研究